

(研究発表題目)第二言語における幼児の言語構造の構築ーピボット・スキーマの機能に焦点を当てて

## 1. はじめに

本稿は、日本語を第二言語(以下, L2)とする幼児(以下, L2 幼児)3 名を対象とし縦断的に調査した研究(橋本 2006,2007,2008a,b, 2009)の知見を統合し, どのように言語構造が構築されていくのかを提案する。橋本(2006)においては, L2 幼児が捉えた言語ユニットを軸としたピボット・スキーマが生成され, それを基に言語構造が構築されていくプロセスが示されている。本稿においては, ピボット・スキーマの果たす機能に焦点をあてて論ずる。認知言語学を L2 研究に取り入れることの有益性については森山(2005:142)が主張している。

## 2. 先行研究

第一言語及び L2 習得では, 習得初期に丸暗記の固まりのまま記憶されることが多くの研究で報告されており(Hakuta 1974 等), 完全な固定表現(例 How are you?)とスロット付きの表現(例 Can you \_\_?)の2種類があるとされている(Hakuta 1974 等)。この固まりのままの学習が果たして文法ルール獲得へ繋がるのかといった点については, 長きに亘る議論の的となっている(Krashen & Scarcella 1978 等)。一般認知能力によって言語の習得が進むとされている用法基盤モデルの立場をとる Tomasello(2003)は, 1 語をピボット(軸)として他の多数語と結びつく現象を, 「ピボット・スキーマ(Pivot Schemas)」(筆者訳)(Tomasello 2003: 114-126)生成によるものであるとして, 習得プロセスの一段階に位置づけた。Tomasello は「動詞-島仮説」(Tomasello 1992)を提示しているが, Pine et al.(1998)は習得の基盤が動詞に限らず動詞接辞・助動詞等の, 高い頻度のマーカーを中心に知識が組織なされると述べている。

このような先行知見を鑑み, 日本語の言語習得がどのように進んでいくのかを明らかにするためには, 何を基点として, どのように日本語の文が構築されていくのかを明らかにしていく必要がある。L1, L2 幼児を対象とした橋本(2006,2007,2008a,b,2009)は, 動詞・形容詞・形容動詞及び接辞, 名詞及び助詞の両方において, ピボット・スキーマが生成され習得が進むことが示されている。

## 3. 研究課題

ピボット・スキーマの生成が言語構造の構築において, どのような機能を有するのかについて検討し提案する。

## 4. 考察と結果

### 4.1 スキーマ生成と言語事例について検討する。

#### 1.動詞句(橋本 2006,2007,2008)

□+ちゃったの産出

ex. ピンク+ちゃった →食べてちゃった(動詞仮原形)→食べちゃった

□+できた → □+た

ex. 食べてできた→食べてた(動詞仮原形)→食べた

□+できる→□+れる, られる

ex. 食べてできる→食べれる→食べられる

## 2. 名詞句(橋本 2008, 2009)

これは→□+は 助詞に基づくスキーマ(ex. □+の, □+と)

## 4.2 ピボット・スキーマの機能として4つを提案する。

### 1. 最初に固まりで覚えたものの構造化をもたらす。

助詞などの名詞+助詞がくっついた形を最初に習得する。その後、スロット化することで、句の構造化がなされる。

### 2. 「スロット付きスキーマ」(橋本 2006)をルールとして、産出を行う。言語能力が低い場合でも、コミュニケーションの達成を図ることができる。

### 3. 固まりで記憶した規範的形式(以下, TL)と「スロット付きスキーマ」との相互作用により習得を進める。

橋本(2006)では、ボトムアップ的に作り上げたルールである「スロット付きスキーマ」からの産出(例 食べてちゃった)と TL の固定表現の産出(例 食べちゃった)が相補的になされていた。「スロット付きスキーマ」が TL 形式が全くわからない際の主導的な役割を担ったり、TL 形式を知りながらも咄嗟に思いつかない際のバックアップ装置の役割も果たしていた。

### 4. 「スロット付きスキーマ」の合成により、より大きな言語構造が構築される。

動詞、接辞(橋本 2006, 2007)において、名詞と助詞(橋本 2006, 2007, 2008b)において、スキーマが生成され合成されることが示されていた。このことからスキーマの分離と合成により言語構造の構築が進むといえる。

## 5. まとめ

本稿においては、ピボット・スキーマの機能に焦点を当てて検討し、卓立性のある言語ユニットに生成されたスロット付きスキーマが習得を駆動することを示した。固まりのままの習得がルール獲得に繋がるのかという議論に対する1つの根拠を提示したといえる。本稿は、約5年に亘る言語事例を1つ1つ丁寧に拾い上げ検討したものである。データ数は限られたものではあるが、今後の研究の一助となるのではないかと考える。

## 主要参考文献

橋本ゆかり (2006). 「幼児の第二言語としての動詞形の習得プロセススキーマ生成に基づく言語構造の発達」『第二言語としての日本語の習得研究』9: 23-41.

橋本ゆかり (2007). 「幼児の第二言語としてのスキーマ生成に基づく言語構造の発達—第一言語における可能形習得との比較—」『第二言語としての日本語の習得研究』10: 28-48.

橋本ゆかり (2008a). 「日本語を第二言語とする幼児のスキーマ生成による文構造の構築プロセス—使用依拠モデルの観点から助詞の使用に焦点を当てて—」『日本認知言語学会論文集』8: 328-337.

- 橋本ゆかり (2008b). 「第二言語における幼児のスキーマ生成に基づく言語構造の構築—第一言語との異同を探る—」 お茶の水女子大学博士論文.
- 橋本ゆかり (2009) 「日本語を第二言語とする幼児の言語構造の構築—助詞「の」と「が」のスキーマ生成に注目して—」 『第二言語としての日本語の習得研究』 10 : 46-65.
- 森山新 (2005). 『認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程』 (平成 14～16 年度科学研究費補助金研究 基盤研究(C)(2) 課題番号 14510615 研究代表者 森山新) 研究成果報告書.
- Hakuta, K. (1974). Prefabricated patterns and the emergence of structure in second language acquisition. *Language Learning*, 24, 287-297.
- Krashen, S. D. & Scarcella, R. (1978). On routines and patterns in language acquisition and performance. *Language Learning*, 28, 283-300.
- Langacker, R. (2000). A dynamic usage-based model. In M. Barlow & S. Kemmer (eds.), *Usage based models of language* (pp. 1-64). Stanford, Calif.: CSLI Publications. (坪井栄治郎訳 2000「動的使用依拠モデル」坂原茂編『認知言語学の発展』ひつじ書房 61-143.)
- Pine, J. M., Lieven, E. V., & Rowland, C. F. (1998). Comparing different models of the development of the English verb category. *Linguistics*, 36, 807-830.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Weinert, R. (1995). The role of formulaic language in second language acquisition: A review. *Applied Linguistics*, 16, 180-205.
- Wong-Fillmore, L. (1976). *The second time around : Cognitive and social strategies in second language acquisition*. Ph. D. dissertation, Stanford University.